

膳、自、簾中、被、下タルヲ、彼卿サハ、ト食テ後、我前
ヲ又簾中へ指入テ□ケリ。其時如法懽感アリケリ。無、陪
膳時ハ、我持テ出マシキ程ノ人ハ、本ノ方へ返トナム。

但依、人可、依、事者歟。

益田氏が、長房・光親いずれか一度の話が浮動して二話となつたと推量するのに対して、安良岡氏は、長房と光親と時を異にする二つの事実があつたのであらうとし、「ほぼ同様の状態であつたがために、同じく院が賞讃されたものと思われる」と見解を示されている。長房の話と光親の話はたしかに別時であらう。情況が酷似するのもその通りである。たゞし僅かな、しかし重要な差がある。長房が頂いたのは「供御ノ御ワケ」であり、光親の場合は「供御」であつた。終日祇候する近習長房に對するいわば私情的ねぎらいの「御ワケ」と、院中行事としての最勝講に奉行を勤める公的立場にある光親への「供御」という相違といつてよい。「御ワケ」の実態がどうであれ（院が箸をつけたか否か、どの程度のお下り膳であらうと）それは、「サハ／＼」綺麗に頂戴すべきであつたらうし、光親が御簾に返し入れたのは、「光親のおろし」ではない。「供御のおろし」としてであり、食い残す事が作法であつて、その「おろし」は誰人が拝領すべきものだった、と見るべきではなからうか。それは猫間中納言光隆の雑色が、「光隆のおろし」としてではなく、「田舎武士の賤しむべき食膳のおろし」として投げ棄てた理と通ずる。しかし院の女房にはその理はわからない、もしくはわからなくなつていて、光親の食い残しとしか理解できなかつたのであらう。

ともあれ「おろし」「わけ」等の語は、単に語義を得て終るものではなく、その用語をめぐる習俗や心理、その変遷という問題まで考えるべき事をうながすように思われる。

既説追録

水原 一

(一) 興福寺衆徒の内紛

『駒沢大学文学部紀要』第四十七号（平成元・三）に、『平家物語』奈良炎上の論」と題して、源平内乱の中で起きた奈良炎上事件を論じた。この事件は専ら平清盛の悪業の最大例と受け取られているが、仔細に検討すると、僧兵側からの挑発や、寺院を砦として闘戦するという、いわば僧兵自滅行為といふべき要素が見出される事を指摘したのである。発表後に、その様な僧兵の体質を裏打すべき補強材料に気づいたので記して置きたい。

『古今著聞集』巻第一神祇・一八、興福寺別当隆覚法印軍兵を發して寺を焼かんとするに春日社神異の事がそれである。治承四年（一一八〇）の炎上事件に先立つこと四十一年の保延五年（一一三九）の事である。隆覚法印（右大臣源頭房の子）が興福寺別当になつたが、衆徒が承服しない。隆覚は數百騎の軍兵

を催して反対派の衆徒の籠る興福寺を攻めたが戦況不利であった。

隆覚、衆徒の頸を切りて御寺を焼き失ふべきよし下知したりければにや、隆覚が兵の中に放火の具を持ちたる者ありけり。寺の外の小家一二宇焼けたりけれども、雨降りて消えにけり。

この事件の経緯自体も頗る興味を惹かれるものを覚えるが、今は、興福寺新任別当と興福寺僧の内紛が合戦に及び、自寺に放火する計画さえあった事例として挙げておく。それは未遂に終わったとはいえ、僧兵気質はそこまでの暴挙を、仏徒としての良心など放擲して企画したのであった。とすれば治承四年の炎上事件に、僧兵側の強硬姿勢が、興福寺等諸寺炎上の可能性を当然承知しつつ、なお不退のものであった事は自明となるであろう。

なお仁安二年八一二六七には興福寺前別当惠信が衆徒を集めて新別当尋範を襲い、喜多禅定院・大乘院・松室等を焼き払うという事件もあった。延暦寺・園城寺でも座主・長吏交替に伴なう内紛が鬭諍に至る例は多く、特に同じ天台門の延暦・園城両寺間での反目は宿執となり、相互に焼討が繰返された事は知られている。隆覚の事件の前後には、高野山でも伝法院方覚鑊の追放が堂舎破却にも及び、高野・根来の鬭諍がその後尾を引いた事も知られている。そうした諸大寺内の紛争・鬭争は当時の宗教界情勢の一風潮というべく、治承の奈良炎上もそういう史的気運、僧兵気質をも併せ考慮して既説を固めて置きたい

と思う。

(二) 太平記解釈小見補記

『駒沢国文』前号(第二十七号)に「太平記解釈小見」と題して「研究余録」の項に小文を掲載したが、関連すべき情報をその後得たので、ここに披露しておきたい。

*

*

「麻や蓬」の題で、日野資朝の子阿新丸の佐渡脱出話について記したが、その直前に当る箇所、本間山城入道の館を忍び出る阿新丸の行動が『太平記』に次の様に描かれる。

堀を飛越んとしけるが、口二丈深さ一丈に余りたる堀なれば、越べき様も無りけり、さらば是を橋にして渡んよと思て、堀の上に末なびきたる呉竹の梢へさらさらと登たれば、竹の末堀の向へなびき伏て、やすやすと堀をば越てげり。

少年冒険小説の一場面として挿絵にも馴染深い所である。この「呉竹」について『徒然草』に、宮中のそれを説明して、「呉竹は葉ほそく、河竹はひろし」とする。辞典類の多くは淡竹の異名として、『倭名類聚抄』の「似篁而下節茂葉者也」(「篁」はカハタケと訓ずるのであろう)などを引いている。『太平記』の諸注に、呉竹は淡竹の異名であるとするのはそれに基づくであろう。その他、布袋竹の異名、真竹の異名等説明種々であり、調べて行くと混乱するばかりである。古典集成『太平記』の頭注には、「ハチク。マダケ。中国産の大形の竹。高さ二〇メートル

ル、直径一二—一三センチに達するものがある」と見え、本文理解に一応該当させ得るが、辞典類の混乱ぶりが解消されるわけでもない。

ある時偶然に佐渡の竹細工をテレビ画面で見た（犬も歩けば棒でテレビの情報も抱えている課題と接点を持つと馬鹿にはできない）。相模や芝居の巡業に使う大きな行李こぶせを竹で編んでいる。太く粗い側面も勿論だが、目を見張ったのは、底から稜に当る部分を皮つきの割竹でがっちりがっちりと囲うように形造くるのである。多分四つ割にしたその青い太さが見るからに頭丈そのもので、乱暴に投げ出しても平気な弾力が感じられる。しかも角からはみ出した部分は見事に内側へ折り曲げられて手ざわりのよさが知れる。細工しながら老人が、——これは佐渡の竹でないのだめた。籠などの小物は奈良・京都の竹がよいが、行李や葛籠くわらごは佐渡の竹に限る。佐渡の竹は太くて、丈が高く、しかも弾力が強いから——という事を咄々と語っていた。阿新丸が堀を越えたのはまさにその竹でなければなるまい。『太平記』は恐らく、竹の美称くらしいの気持で「呉竹」と言ったのであろう。

ただし、「麻や蓬」といい「佐渡の竹」といい、語義解釈を超えた現実感に裏打されるからといって、阿新物語の事実性を主張するわけではない。資朝に關与する僧、阿新を助ける山伏、そして佐渡に多い寺門派系寺院などから想像してみたい説話形成問題に参加させてよい資料の一端であろうと思う。

* *

「笠置の攻口」については、南の手が『太平記』の記載は誤

りで、奈良方面からの進路があったはずだという私の推論には、かなりの同意が得られた様に思った。しかし、「光明山の後を廻て」が、「中川成身院の後を廻て」とあるべきを誤ったかとする推論は、いかに光明山と中川の縁の深さを認めるとしても、一步説得力に疑問が持たれ、私自身これは苦肉の論法だったのであるが、高橋文二氏から、その私の主張する南の手の道筋に「光明寺」という古寺が現存するという貴重な情報を頂いた。謝意を抱きつつ以下の考察を記す。

奈良市から笠置を結ぶ県道の笠置寄りに狭川地区と総称する一画があり、現広岡町（最も笠置に接する）から南西に下狭川町・西狭川町・狭川東町・狭川西町（狭川西・狭川東の一部が明治二十二年に合併）と連なる。その狭川両町の県道東（従って旧は狭川東町に属した）に光明寺がある。中墓山ちゅうぼさん光明寺と号し、古く真言宗、笠置の末寺であったという以外に古伝は不詳。中世後期福岡氏が居城を置いた頃からの寺伝はうかがわれるが、この地区の諸寺院の複雑な変遷を考慮するとしても（註光明寺の往古の存在はほぼ認めてよいように思う）。

太平記の時代に光明寺がどの様であったか、現在地のとおりであったか未詳であるが、太平記の「光明山の後を」が実は「光明寺の後を」であれば完全に南の手の攻口の疑問は解決する。光明寺が笠置末寺として加担する情勢にあったとすれば、狭川を避けそのすぐ後（東方）を迂回し須川沿いに笠置へ迫ったという事も考えられよう。狭川地区が笠置に近接してはいても、光明山の現在地はその南端で、西方岩船寺に近い。寄手の

経路の説明として不適當ではあるまい。而して私になお諦め切れぬのが、中川と光明山との一帯感である。すなわち光明寺を経る道が、より著名な光明山に誤られる上には、その道筋が中川附近を通過する事の印象が今一つ添加されていたのではないかと思うのである。

注：狭川地区には社寺が多く、その変遷史も複雑である。現存最古のものとして、平安期の薬師像を安置する下狭川藤尾の薬師堂があるが、そのまま移されて松尾山中墓寺に現存する。中墓寺は笠置末寺松尾山勝福寺が廃寺となった跡地に、狭川東町の中墓寺を移し、下狭川の古寺大念寺・西念寺を合して建てられたものだが、中墓寺の寺号は光明寺の中墓山という山号と因縁がありそうである。また光仁帝陵と普光寺通称広岡寺（広岡町）、廃寺安養寺（下狭川町）等も複雑な変遷があった様である。九頭神社等、神社史にも興味ある問題はありそうだが省略する。（以上も高橋氏教示資料による）

二つの作品評

—忍月と不知庵と—

畑 實

森鷗外は明治二十三年一月、批評家を論じた文中で「余等は重に一々の詩、殊に小説を評したるものを挙げんと欲して先づ二家を得たり。誰ぞや。国民之友に忍月居士あり。女学雑誌に

不知庵主人あり。」（『今の批評家の詩眼』）と言っている。

石橋忍月は二十一年三月に「浮雲第二篇の褒貶」を『女学雑誌』に発表した後、七月の「藪鶯の細評」から主たる発表舞台を「国民之友」に移した。一方内田魯庵は二十一年十、十一月に「山田美妙大人の小説」を『女学雑誌』に発表したのを手始めに「文覚上人勸進帳を読む」「紅葉山人の『風流京人形』」などを同誌に書き、忍月にかわって『女学雑誌』で活躍をはじめたのである。鷗外の言葉はこのような二人の活動状況と発表舞台をみてのものであろう。

ところが忍月はこの鷗外の文が発表された二ヶ月のちの三月に「江湖新聞」に入って同紙と「国民之友」とにかけもちで執筆をはじめたが、やがて同年十一月に今度は「国会」に移り、それと同時に主に「国会」紙面で活動するようになり、他の新聞雑誌には殆んど筆をとらなくなった。それは大学卒業と「国会」退社の直前、二十四年五月頃までに及んでいる。一方、忍月が民友社から「江湖新聞」に移ったあと、「国民之友」の批評を担当したのが『女学雑誌』からかわった不知庵であった。かれは不思議と忍月の去ったあとを襲い、そこを舞台に評論活動をしているのである。

さて明治二十四年二月、「国民之友」第一〇九号にB・Sの署名で『好色二人息子』の評が掲載されている。『好色二人息子』は前年の十二月二十六日に春陽堂から出版された松原二十三階堂の小説で、売薬師、不審紙、丸鑑の三篇からなるものである*。